大神幸祭（おみゆきさんを）

受け継ぐ。伝える。担ぐ。

静かで厳しい冬を越えた峡東地域が賑やかに、晴れやかに、そして熱くなる一日。この地には、春の訪れを告げる伝統の祭がある。その日、地域の学校も休校になるという一大行事の名は「大神幸祭（おみゆきさん）」。屈強な男たちが艶やかな彩りの単衣（着物）を纏い、神輿を担ぎながら独特なステップを踏む。「そっこぉだいっ、そっこぉだいっ」と威勢のいい掛け声がとぶ。早朝、甲斐國一宮　浅間神社を発った神輿は、釜無川流域の三社神社（甲斐市）まで、往復12里余り（およそ50キロメートル）の旅をする。峡東地域に暮らす私たちにとって、「おみゆきさん」という名は馴染みが深い。しかし毎年4月15日に行われるこの祭の意味や歴史、受け継いできた者たちの思いについて、果たしてどれだけの人が知っているだろうか。今回は、大神幸祭に深く関わる3人の方を取材。異なる立場と視点から、それぞれが感じる大神幸祭について語ってもらった。

おみゆきさんを受け継ぐ。

甲斐國一宮 浅間神社
宮司 **古屋真弘**さん

今も昔も変わらずに、
この地に暮らす人々が抱き続ける
神様のお力への信頼感。
それが一番表れているのが
大神幸祭なのではないでしょうか。

かつて、甲斐の国でもっとも大きな祭のひとつ、「公祭」とされていた大神幸祭。「神幸（みゆき）」とは「神様がゆく」、要するに神様がお宮を出られて、祈祷のために里を巡るというお務めを意味しており、その際にお乗りになるのが神輿。大神幸祭がいつから、どのような目的で始まったのかということについては諸説ありますが、その中で最古の説は1100年以上も前。目的は、甲斐の国を川の氾濫、水害から護るという、いわゆる水防祈願だったと言われています。

甲斐國一宮　浅間神社の神様、「木花開耶姫命（このはなさくやひめのみこと）」が神輿に乗って、はるか6里（約25キロメートル）の彼方、釜無川まで出かけ、川の氾濫を治めるための「まつり」を行い、神社にお戻りになる。このおよそ50キロメートルという、神輿が移動するにしてはとても長い距離。さらには、道中、神輿は山梨県庁に寄り、その姿を知事にお披露目するという「まつり」は全国的にみても、大変珍しいものであると思われます。これらのことからも、大神幸祭が、地域の方々に敬われる神聖な神事であることがうかがわれるのではないでしょうか。

祭の当日、私の務めは斎主として神輿がゆく全行程において、神様の一番近くに仕えることです。これまで40年以上、この祭を見続けてきて常に感じていること。それは、この地に暮らす人々が抱き続ける浅間神社におられる神様のお力への信頼感。自然と向き合う力を敬う心。それこそが、この祭をはるか昔から現在、そして未来へと受け継いでいく源になっているのだと、私は思うのです。

写真協力：ふえふき旬感ネット

神様の「下」を幼子を抱いてくぐる。これ以上のご利益があるだろうか（平成28年の大神幸祭より）

江戸時代の大神幸祭の様子。まるで大名行列のよう（宝暦絵巻より／部分）

おみゆきさんを伝える。

笛吹市教育委員会 文化財課
課長 **猪股喜彦**さん

おみゆきさん。
その「重要さと奥の深さ」を、
少しずつ皆さんに
お伝えしていければと思います。

縁があって一宮に住み始めてから、それまで名前は知っているという程度だった大神幸祭を、身近に感じるようになりました。同時に、遠く離れた釜無川まで神輿を担いで出向くという、そのプロセスにとても興味を抱かされたのです。

この祭の本来の目的や意味を知った時、その重要さと奥の深さに驚きと感動を覚えました。

大神幸祭は、県内においてその名をよく知られたお祭です。氏子が纏う派手な着物や掛け声などがユニークであることから、メディアにも取り上げられますが、その真の意味について、きちんと語られることは、あまりなかったように感じられます。

大神幸祭は、この地方に春の到来を告げる、ただ賑やかなだけのお祭ではなく、川の氾濫や水害から、私たちが暮らすこの地を護るための「祈願」という目的を持った重要な神事であるということ、一宮の浅間神社から、はるか釜無川まで出かけることの「意味」について知っていただき、私たちの身近に、こんなにも重要で奥の深いお祭があるのだということを、お伝えしていければと考えています。

「おみゆきさん」について知っていただいて、お祭の愉しみと同時に「有り難味」を感じてもらえたら嬉しいですよね。

お祭を愉しむものとしてとらえることも、もちろん大切です。でも加えて、それが持つ本当の意味を知れば、感じ方が変わると思います。どうしてそこにあるのか、どうしてこういうことをするのか。視点を変え本質に触れて、発見や気づきを愉しむこともおすすめです。

おみゆきさんを担ぐ。

おみゆきさん。何故そう呼ばれるのか知っていましたか？

大神幸祭の見どころは、やはり神輿！
ぜひ見て欲しいですね。
掛け声や激しいステップ！
圧倒的な迫力を感じて欲しいです。

平成29年大神幸祭
当番氏子 **海野孝仁**さん

4年に1度、当番氏子として神輿を担ぎ、はるか釜無川を目指す。何度か経験していることではありますが、祭の日が近づいてくると、今でもどきどきしますね。「やっときたか！」と、思わず武者震いをしてしまいます。

大神幸祭。それはこの地域に住む私たちにとって、幼い頃から毎年、当たり前のように見てきた祭です。小学生のときには子ども神輿の担ぎ手として参加もしていました。だいたいこの地区の氏子さんたちは、20代くらいになると神輿の担ぎ手になります。そう、大神幸祭はこの地区の人たちにとって「生活の一部」のような存在になっているんです。ですから、次の世代にもこの伝統を、きちんと引き継いでもらいたいという思いが強くあります。

大神幸祭の神輿はおよそ400キログラム。それを激しくステップを踏み、掛け声をかけながら長い距離担ぐわけです。掛け声を叫び続けるので、本番の後、数日間は声がガラガラ。

しっかりとした準備も大切。練習は本番の2ケ月ほど前から週に1～2回、練習用の神輿に土のうを積むなどして重くして行っています。

そして、怪我なくみんな無事に帰ってきて、神輿を納められたらと思います。祭の見どころはやはり神輿！担ぐところを見て欲しいですね。御神幸祭ならではの、圧倒的な迫力。御神幸祭の神輿を担ぐことはこの地域に生まれ育った者の誇り。何度経験しても祭の前は自分の中で気持ちの昂まりを感じています。